

# 青嶺

Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

## 熱戦が続く！ 夏季総合体育大会

激しい梅雨の大雨の影響で、日程が二転三転し心身のコンディションを保つことが難しいなかで各競技、熱戦が繰り広げられています。まだこれから戦いが待っている部は悔いを残さないよう全力で頑張ってください。

戦いを終えた部は新たなステージに向かって進んでほしいと思います。自分自身の心にけりをつけて、顔を上げ前を向いて下さい。

それぞれの節目となるこの大会が、皆さんの心に思い出として刻まれ、これからその競技を続けるにしても、辞めるにしても、また新しい何かを始めるにしても、きつと成長の糧となることを信じています。

## アメリカ人の クラスメート

佐世保の学校にいた時に、校区内に基地があったことからアメリカ人の生徒を受け持ったことがあります。

小学6年の二学期から編入しました。日本語は小学校低学年くらい、ご両親は一切話せません。日々の授業や学校行事・時間割などの連絡は基本的には日本語ですが、複雑な内容は英語の先生に助けてもらいながら、本人とも家族ともコミュニケーションを重ねました。

なるべく日本語に多く接する機会を増やすことを心がけ、子どもたち同士の関係性を生活を送れるような学級を目指しました。私とは交換日記を日本語でかわし、授業では子供たちが交代でノートを取りながら、彼が少しでも日本語がわかるようにとサポートを頑張りました。

当然うまくいかないことだらけで、すれ違いやいさかきも起こりました。忖度せずストレートにぶつかり合います。

ですが、そこは柔軟な子供同士で、壁をひとつ乗り越えるたびお互いの距離が少し近づく感じでした。

また文化や価値観の違いにも遭遇しました。「グジラの肉を先生は食べますか？」という質問では延々と論争を続けたり、家庭訪問に行く時、ピザとシヤンパンが用意されていたり…。家庭訪問という文化はアメリカにはなく、もてなすパーティーの準備がされていたのでした。お菓子をもってきてふるまうのもアメリカ流で、一つ一つの好意に感謝しながらも、つたない英語で日本の学校について理解してもらえるように、保護者とは話を重ねました。

秋の弁論大会で「アメリカと日本の学校の違い」という題でクラス代表になった彼は、体育館で両親の前で堂々と日本語で主張を行い家族は大変喜ばれました。その後帰国し、風の便りでは十七歳で飛び級して大学に入学したそうです。

彼とその家族と、当時のクラスメートたちとの一年間は本当に濃かったですが、それぞれ出来事の中に国や考え方の違いを超えて、互いを理解するためのヒントがあると思います。人間同士のコミュニケーションの本質は分かり合おうとすること、対等であること、そして相手を知り、自分を知らせてもらうことです。それぞれの人生が素晴らしいものであるよう願うばかりです。

## 子育て雑感

「なぜ校長先生なったんですか？」よく尋ねられる質問です。会社員だった私が今、校長を務めている…昔の私を知っている人からは「意外」だと言われることもあります。

ふと振り返ると人生の節目で分かれ道があり、選択してきた、もしくはそう進まざるを得なかったように思えます。その時々で悩み抜き、納得までいかなくても自分の選択には自分で責任をもとうと生きてきました。

子どもたちが進路で迷ったとき、いろいろあったとしても、最終的には自分で決めてほしいと私は思います。できる限り情報を集めて時間をかけて一緒に悩んで…最後には自分自身で決断する。迷いがあっても今決めた答えが自分にとつては「ベスト」なのだと思える。そしてその場所まで一生懸命に頑張る…その積み上げで本当の意味で自信が備わってくるのでしょうか。子どもは「小さな大人」です。一人の人間として対峙し、失敗も含めてその意思をできる限り尊重したいものです。

## 校長室より

そして自分一人の足で人生を逞しく歩くことができる、自立した人になってほしいと心から願っています。

私の祖父は三度戦争に行き、終戦の一月前に亡くなりました。喧嘩などしない、優しく穏やかな祖父だったそうです。最初は「お国のために」戦争に行くと言っていた祖父も三度目には「もう行きたくない」と言ったそうです。祖母のおなかの中にいた叔父は父親の顔を知りません。祖父も生まれてくる我が子をどんなにか見たかったことでしょう。祖母は戦死をきいた時より、戦地から次々に兵士が帰還してきたときの方が妬ましく、辛かったそうです。祖母は女手一つで三人の子供を育て九六歳で亡くなりました。お坊さんとのお話で「あの世で会ったら私と気づいてくれるやろうか？」と漏らしたそうです。祖母にとつて夫の面影は三十歳のままなのに年取った自分を気づいてくれるだろうか、と心配していたのです。祖母の葬儀で、私は「むこうでおいちやんにたくさん甘えてください。本当にありがとうございます」と言いました。

おばあちゃん子だった私は幼いころから戦争を憎みました。暑い夏は大好きな季節ですが、祖国に帰りたくても帰れなかった祖父を思う、ちよっぴり辛い季節です。